

縄文土器の紹介

久田正弘

1. はじめに

筆者は、諸事情から久しぶりに縄文土器の報告に携わった。その結果、報告された土器でも細部や実測されなかった破片に注目することで同じ土器でも別な顔を持つ例(第1～4図1～4・7)を確認した。また報告されなかった土器(第4・5図8・9)と筆者の負の遺産(第6・7図10～12)の資料紹介を行う。

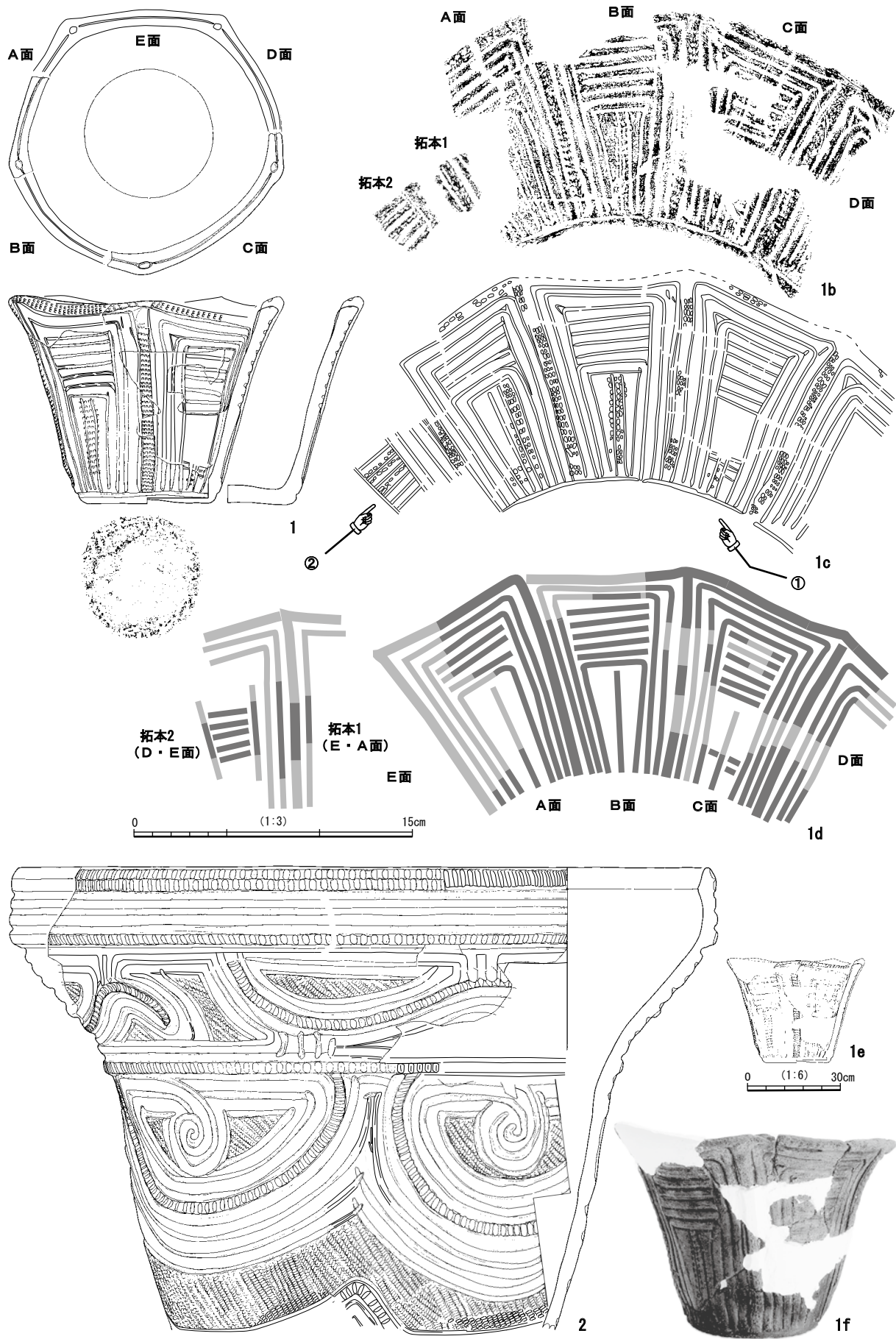
2. 羽咋市四柳白山下遺跡の縄文土器

第1図1は白田・久田ほか2018第320図3(古串田新式)であるが、修正した。五角の面を持ち、E面以外は破片がある。文様は5本の縦隆起線を配置した後に半截竹管で半隆起線文を施文する。縦コの字状の半隆起線で区画文を描き、その中に上側から横位半隆起線などを充填する。区画文は3条であり、3本目はA・B面では下側、C・D面では上側を区画する。A・B面は横位半隆起線(3・5本)の下側に、区画文・縦位半隆起線・櫛歯刺突文を持つが刺突文の入れ方が少し異なる。C面は区画文と6条の横位半隆起線の下側に、縦位半隆起線・横位半隆起線・櫛歯刺突文(①)を持つ。拓本1はA面左側かE面左側であろう。拓本2(②)はD面中央かE面左側であり、縦1条と横5条の半隆起線文と横方向の刺突文は、他と大きく異なる。展開図(1b～1d)・拓本2を提示したことで、5面とも文様が異なる可能性が指摘できた。

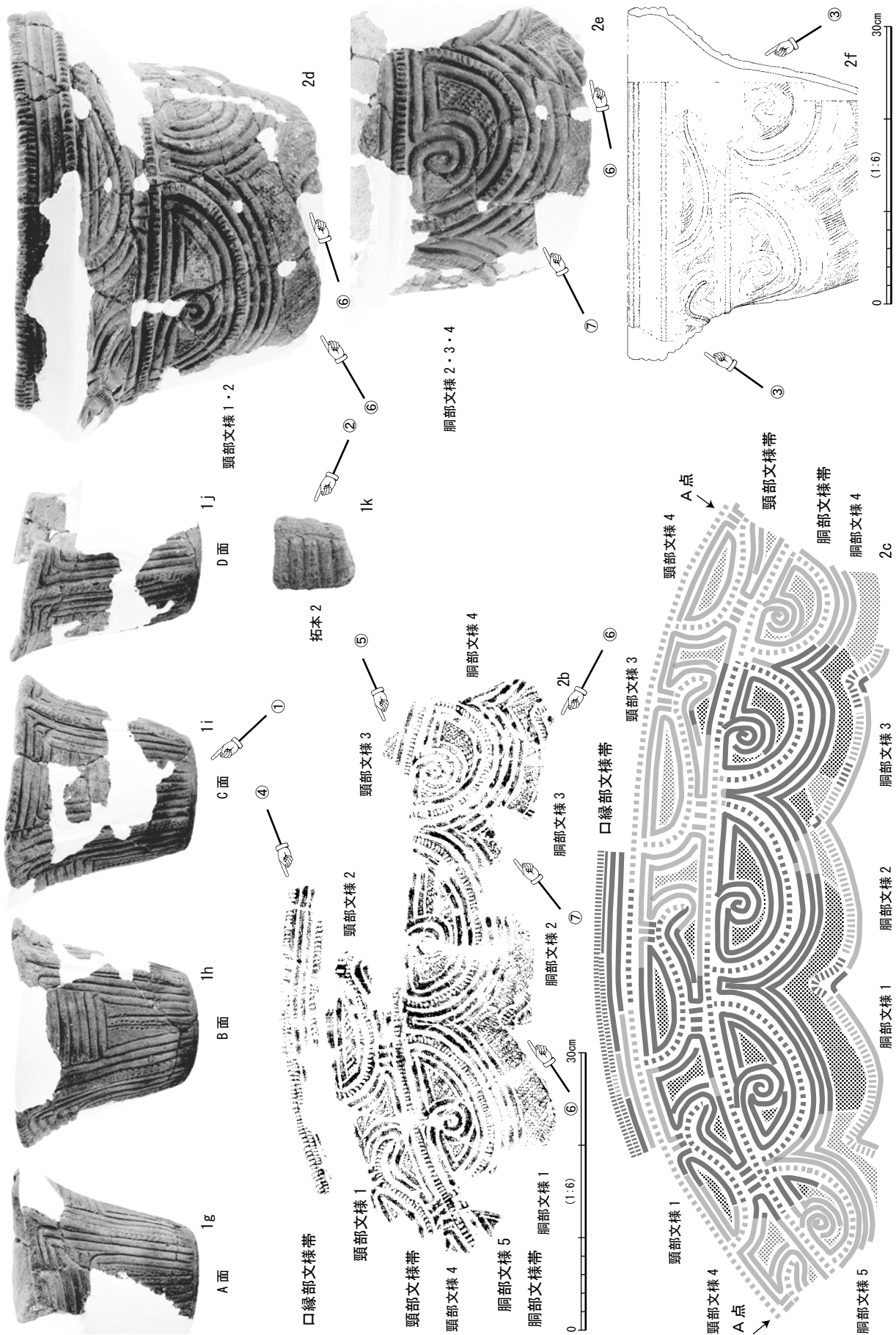
第1図2は白田・久田ほか2018第335図231(古府式)で、修正が間に合わなかったので新たな図面を提示した。2f(原図)は復元の関係で文様の高さに問題(③)がある。文様帯は、刻み目隆起線を区画文様として口縁部・頸部・胴部文様帯があるが、胴部文様帯が高さと2段文様なので主文様帯である。口縁部には短い刻みを上下2段入れるが、右端では長めの刻み1段入れて下側は無文(④)である。口縁部には2条の半隆起線を施文するが、短線文様が組み合わされるかは不明である。頸部文様は刻み目横J字状隆起線・連弧状文・逆∟(かぜかんむり)状文が文様単位である。頸部文様帯は4単位だが、頸部文様3の縄文の位置が右側にずれている(⑤)ので、頸部文様1・2・4より横に長いまたは頸部文様2・3の間に短い調整文様が入る可能性があるだろう。胴部文様1・2は胴部の半分を占めており、残りの半分に幅の狭い胴部文様3～5が想定される。文様幅が狭い胴部文様3～5は、渦巻き文が左側に寄り、内側の半隆起線文は1条少なく、渦巻き文は1条多くなるなどの変化が確認できる。胴部文様の下端には半隆起線2条(刻み目と無文)が連弧状に繋がる(2d・2e、⑥)が、胴部文様2・3の間の頂点は左側に寄っている(⑦)。2は頸部・胴部文様の単位が異なることや基本文様の幅と細部が異なることが確認出来た。

第3図3は白田・久田ほか2018第335図232(古府式)であり、修正した。2条の刻み目隆起線で口縁・頸部・胴部文様を区画し、高さがある頸部文様帯が主文様帯である。口縁部文様は、2条の半隆起線を持つが、間に短線文が組み合わされるかは不明である。頸部文様帯は、刻み目隆起線文を中心とする連弧状文とそれを繋ぐ三角形状文と縄文が組み合わされる。胴部文様は3条の半隆起線の下2条を横位の工字状文繋ぐと思われたが、左端には上1・2条を繋ぐ線(⑧)が確認されたので3条とも工字状文が繋いでいる。

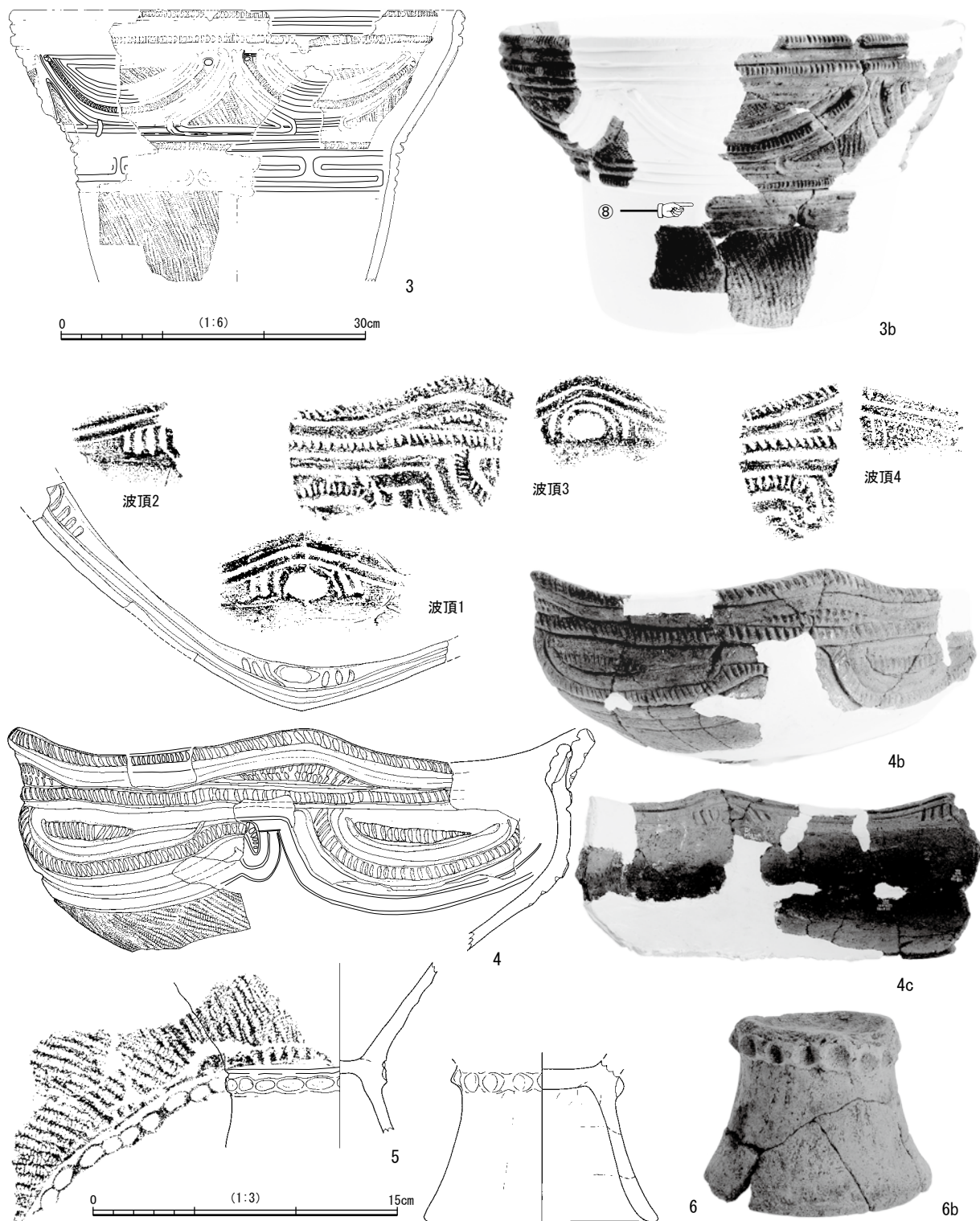
第3図4は白田・久田ほか2018第321図24(古府式)であり、修正した。方形の台付鉢で口縁部は高さが少なく、1条の半隆起線と波頂部下側に刻みを少し持つ。口縁部内面には波頂部に沿って1本の半隆起線を施文する。波頂部内面には、挟り込んだ円形文を短い半隆起線で囲む。波頂1・3・



第1図 四柳白山下遺跡出土の縄文土器 1



第2図 四樹山山下遺跡の縄文土器2



第3図 四柳白山下遺跡の縄文土器3

4の内側は半隆起線で3条の沈線、波頂2は半隆起線で4条の沈線を持ち、波頂1・3の円形文は挟りが深い。胴部文様は、刻み目隆線文を連弧状にし、右側先端を短く下側に降ろすが文様の高さが無い。半隆起線は内側に1条・外側に2条を配する。内側には縄文ではなく刻みを充填する。台付部は5・6のように体部下半は縄文を施文し、台部には指頭刻みを持つ隆線を持つものが組み合わせられると思われる。

第4図7は、白田・久田ほか2018第339図265（古串田新式）の方形台付き鉢であり、修正した。文様は半截竹管後沈線で、沈線は幅が広い。口縁部文様は約3/8がある。7e(原図)は報告書では口縁部・

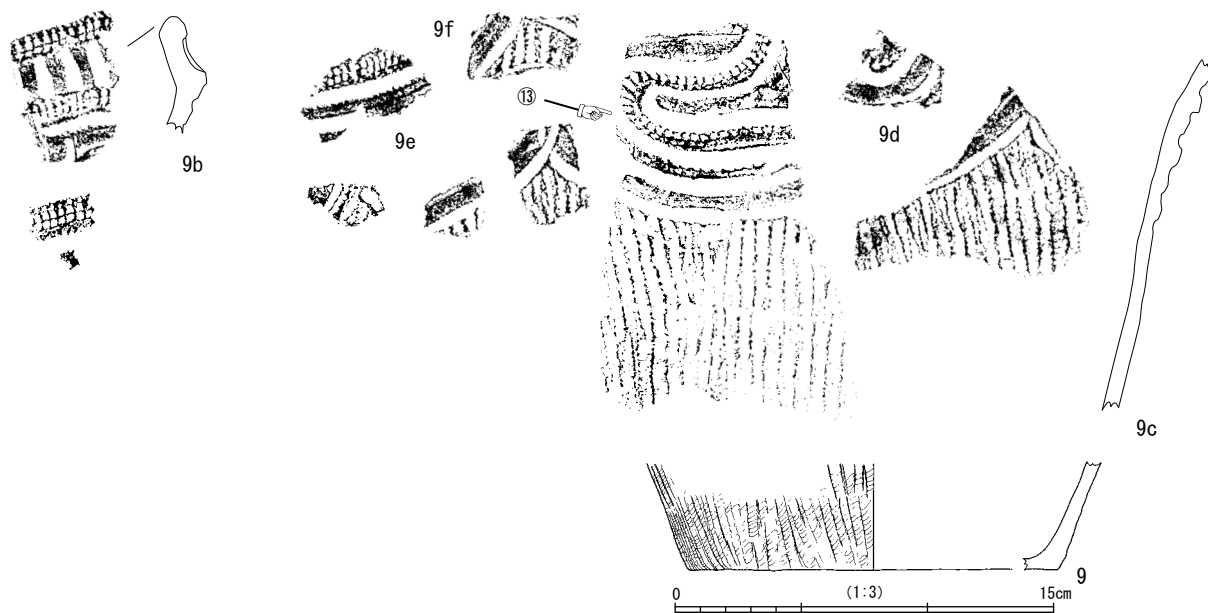


第4図 四柳白山下遺跡の縄文土器4

胴部文様の修正が間に合わなかった。下面図の左側には刻み目隆線逆J字状文があるが、正面図では縄文帯と欠損部が描かれている(⑨)。口縁部文様は短線文が主で、波頂部に重連弧状を配し、他は短線文と四角形状文を連ねるが、正面図右側は描かれてないが左側は復元文様が描かれている(⑩・⑪)。胴部はほぼ1/2が存在するが、文様は刻み目隆線で渦巻き状文・J字状文と右端に逆八字状文を基本とし、4単位である。

第4図8はD区H17-2区24層・G17-1区24層・G17-1区21層・G17-3区21層出土で、胴部径が20cm程度の中型深鉢(古串田新式)である。半截竹管のち沈線で、文様帯・文様構成などは第2図2に近い。8fは頸部文様であり、半隆起線文の間に三角形の縄文帯を持つ。8は下側の連弧状文が左側で波状になるので、上側の刻み目隆線も波状(⑫)になるのであろう。刻み目隆線の先端は渦巻き状ではなくて8bのように上で止まるのかもしれない。8の連弧状文の中には小さい渦巻き状文と右端に小さな縄文帯がある。8cは連弧状文の右端で、右上には小さな縄文帯を持つ。胴部の縦に降りる刻み目隆線は8d・8eがあり、8dは直線的、8eは渦巻き状に降りるようだ。想定される文様は8gであり、左側は8dか8eが付くと思われる。

第5図9はF区G8-3区包含層145出土の底部(白田・久田ほか2018第343図325)であり、同じ取り上げ番号で9bなど(古串田新式)がある。文様は浅い半截竹管のち沈線である。口縁部(9b)は逆くの字状口縁で4波頂と思われ、刻み目隆線と縦の沈線文を持つ。9bの下側は頸部文様帯と思われるが、胴部文様帯の可能性もあろう。胴部文様帯(9c)は刻み目隆線文が縦から横に流れる文様で、その上下を半隆起線が囲む。隆線文の刻みは、上側の沈線側から押されており、刺突は途中で方向が変わる(⑬)。刻み目隆起線文の先端は、J字状(9d)になる部分がある。胴部下端は2条の半隆起線文が連弧状に続く。9fは胴部上側(頸部文様)になる可能性があり、連弧状の下には半截竹管による上向きの弧線が入る。9eは半隆起線の上に刺突文を持つが、頸部文様であろうか。



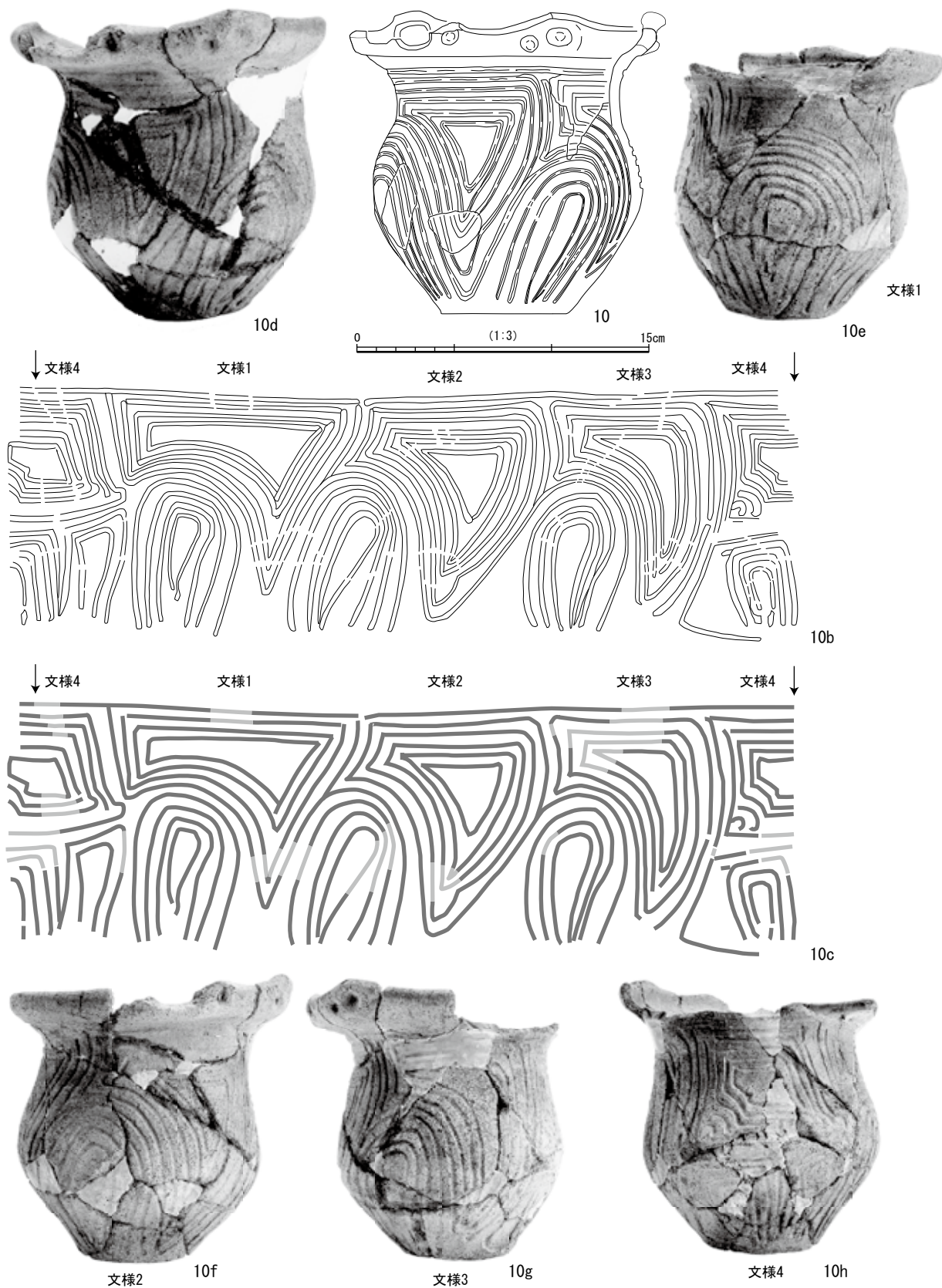
第5図 四柳白山下遺跡の縄文土器5

3. 大津くろだの森遺跡の縄文土器

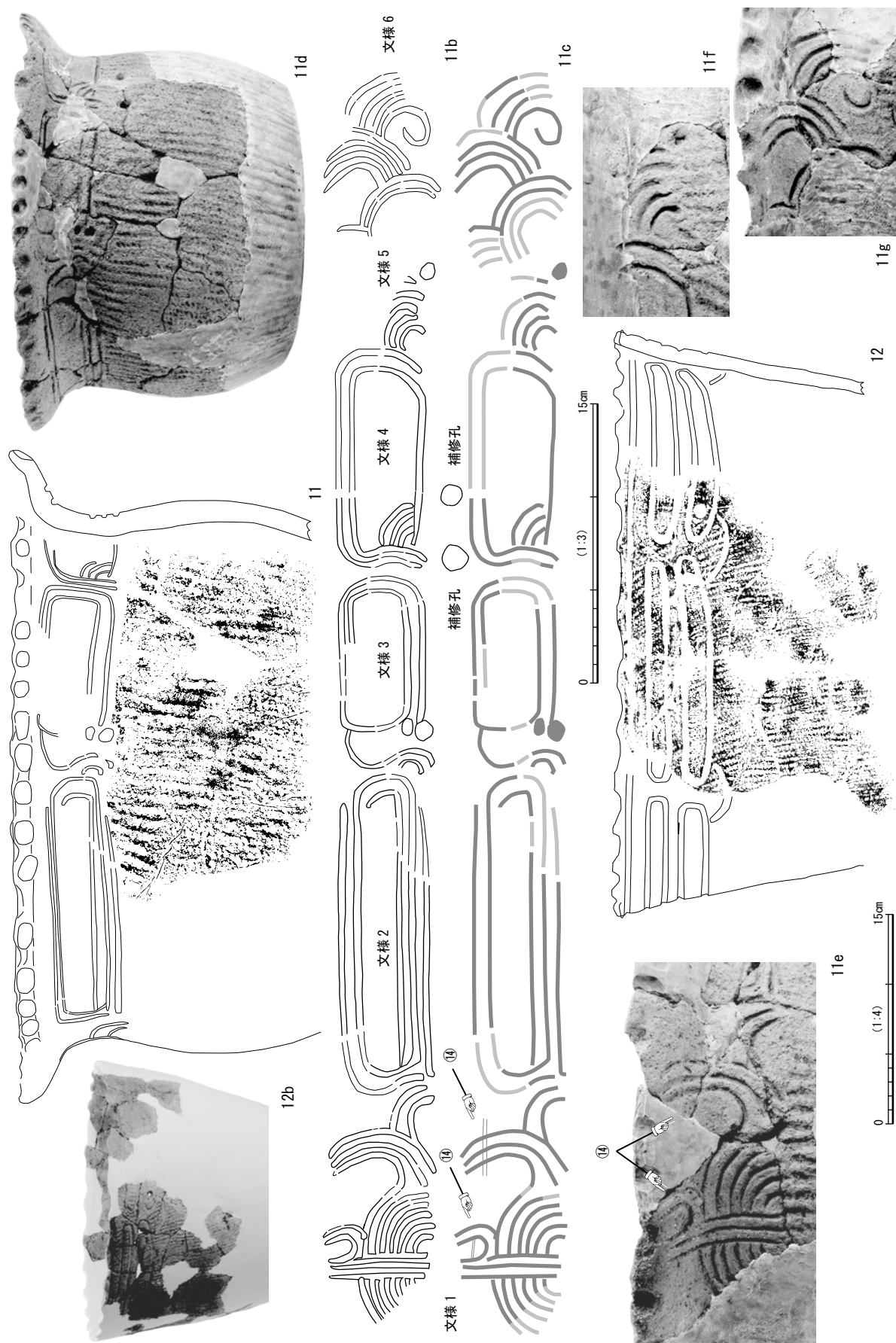
大津くろだの森遺跡は、七尾市(旧鹿島郡田鶴浜町)大津地内にあり、発掘調査は平成6～8年度に、整理作業は平成10年度に、報告書刊行は平成12年度に実施した。資料化を行えなかった第6・7図

10～12（久田ほか2002図版27）を紹介する。

第6図10はI区D12区北東-谷-畦2層出土の気屋式深鉢である。口縁部は約半分があり、低い波



第6図 大津くろだの森遺跡の縄文土器1



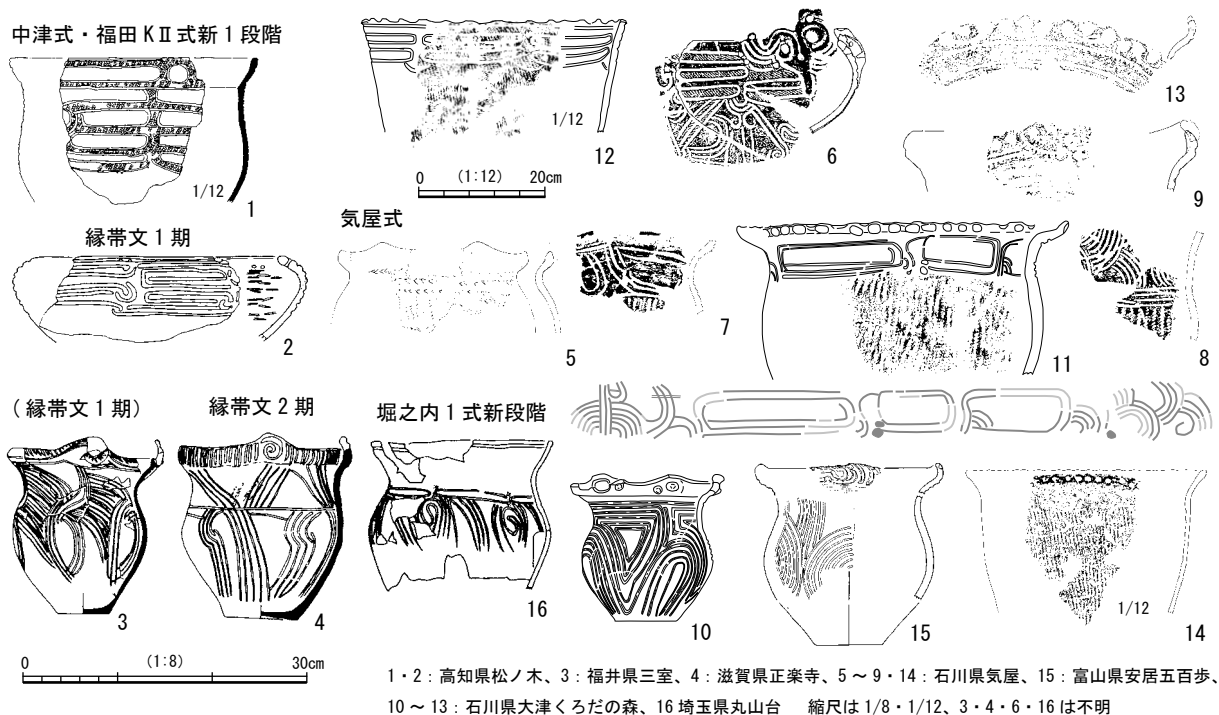
第7図 大津くろだの森遺跡の縄文土器2

頂部2つに円形の割り貫きと円形刺突文を持つが沈線や刺突文はない。口縁部の両側には波頂は、存在しないので裏側には同様な波頂部を持つかまたは持たないのであろう。器形では頸部と胴部が分かれるが、頸部・胴部文様は一体化している。文様帯は多重沈線を基本とし上下2つの文様で構成され、上側は三角形と四角形の変形で構成される。下側は上の文様の左下に位置し、4条の逆U字状文を基本とする。文様1は上の文様と合流しないが、文様2・3では合流している。文様4は上下とも文様1～3と異なり、四角形状文と左下には弧状文が組合され、下側は文様が2つあり、区画文様とは線数が異なる。

第7図11は、I区谷-上層出土の気屋式の深鉢であり、器壁が厚い。口縁部と頸部に文様を持つ。口縁部には指頭の押圧を施文し、頸部には2・3本の沈線による楕円形状と弧線状文を重ねた文様と円形刺突がある。文様は楕円形状文のグループと重弧線文のグループに分かれる。前者は、文様2～4があり、文様2は文様3・4より長く、共に弧線状文が組み合わされるが3つとも異なる。後者は文様5・6・1であるが、文様1と文様6の間(約1/6)が欠損するので、もう1つ文様が存在した。文様1上半には、平行沈線を引いた後に、ナデ消した痕跡(⑭)がある。文様5・6は4本の弧状文の単位が連続して組み合わせられるが、文様1は文様の本数と連続の仕方が異なる。文様3の左側と文様5には円形文を持つ。

第7図12はI区E11区-谷-中層出土の深鉢であり、バケツ型の器形で器壁は厚い。口縁部は低い波状であり、口縁部に1条の沈線を巡らし、上下2つの楕円形文を下側の連弧文でつなぐ文様が8単位存在したようだ。中央右側には補修孔が1つあり、他にも補修孔1対が2個ある。

第8図10～12は後期前葉の気屋式で、前田式から続く型式である。気屋式は古期・中期・新期(米澤2008)に区分され、文様は口縁部～胴部上半に施文し、以下縦縄文を基本とする。気屋式直前段階には中津式・福田KⅡ式中2段階(石田2008)が伴うとされる。10の口縁部形態・無文は前田式的であり、低い口縁部と円形文は5と共通する。10は頸部から胴部下半まで文様を施文する珍しい例であり、15(気屋式中期)や3(玉田1989中津・福田KⅡ式第4様式)や4(千葉2008縁帯文2期)や16(加



1・2: 高知県松ノ木、3: 福井県三室、4: 滋賀県正楽寺、5～9・14: 石川県気屋、15: 富山県安居五百歩、10～13: 石川県大津くろだの森、16 埼玉県丸山台 縮尺は1/8・1/12、3・4・6・16は不明

第8図 文様の関連性

納2008堀之内Ⅰ式新段階C群)などがある。3・10は頸部・胴部文様が一体しており、4は一部繋がり、16は分かれている。11の口縁部の円形刺突文は9・13・14があり、9・13とも沈線内に列点文を入れる。11の楕円形状文は2(縁帯文1期)や7(気屋式)に近いようである。7は重連弧状文を持たないのなら古い可能性があり、7・11の口縁部は外反から短い内湾なので古い可能性がある。11の重連弧状文は8(気屋式中期)と共通するので、11は気屋式中期と同じか古いのであろう。12の文様は類例が無いが、器壁が厚い点は10や久田ほか2002第35図238と共通する。文様的には、1(中津式・福田KⅡ式新1段階)の楕円形文は多段、6(気屋式中期)の楕円形状文は3段あるが、両者とも器形・文様的に同じでない。工藤俊樹・松井政信氏は10～12は気屋式でも古いと指摘されたが、筆者は中期以前としておく。10～12の時期を近年の研究と対比(表1)してみると、文様的に関東地方よりも福井県越前地方より西側との関係が強く伺へよう。しかし東海・信州地方の情報を知らないことや、時期比定に問題があるのであれば筆者の力量不足による。

表1 各地との併行関係

	西日本	縄文土器大観1989	総覧縄文土器2008		石川県		関東地方	
					様式	段階		
時期・段階	中津式・福田KⅡ式	第1様式古段階	中津成立期	古段階	前田	前田	称名寺	1
		第1様式新段階	中津Ⅰ式	中1段階		高波		2
		第2様式	中津Ⅱ式	中2段階		古期		3・4
		第3様式古段階	福田KⅡ式古段階	新1段階	気屋	中期	堀之内	I式古段階
		第3様式新段階	福田KⅡ式新段階	新2段階 新3段階		新期		1式中段階
	縁帯文	第4様式・第1a1様式	四ツ池	1期		うまばち		1式新段階
		縁帯文第1a2様式	北白川上層式1期	2期	酒見	馬替	加曾利	Ⅱ式
		縁帯文第1b様式	北白川上層式2期	3期		米泉		B1式
		縁帯文第1c様式	北白川上層式3期	4期		米泉		B2式
		縁帯文第2a様式	一乗寺K式	5期				B3式
		縁帯文第2b様式	元住吉山Ⅰ式	6期				

4. まとめにかえて

全面を資料化することにより同じ土器でも違う面を引き出せ、細部に注目することで文様の修正を行った。10～12は資料化により、関東地方よりよりも西日本(越前地方を含む)との関連が指摘できよう。最後に、以下の方々から協力・教示を得たが上手く生かせなかったのは筆者の力量不足である。敬称省略、池田 拓、大野 薫、加藤三千雄、工藤俊樹、菅谷通保、菅谷智也子、松井政信、米澤義光、和田龍介。

参考文献

泉 拓良 1989 「縁帯文土器様式」『縄文土器大観4後期・晩期・続縄文』小学館
 白田義彦・久田正弘ほか 2018 『四柳白山下遺跡Ⅳ』石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター
 玉田芳英 1989 「中津・福田KⅡ式土器様式」『縄文土器大観4後期・晩期・続縄文』小学館
 久田正弘ほか 2002 『大津くろだの森遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
 石田由紀子2008「中津式・福田KⅡ式土器」・加納 実2008「堀之内式土器」・千葉 豊 2008「縁帯文土器」・中島庄一2008「称名寺式土器」・米沢義光2008「気屋式土器」『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会
 米澤義光ほか1996『宇ノ気町気屋遺跡』宇ノ気町教育委員会
 山本正敏ほか1990 『安居五百歩遺跡』福野町教育委員会